

今日が MGF としての午前中の礼拝第 1 回目ということで、これは月 1 回のペースでありますので、連続講解説教というわけにはいきません。単発的に聖書のテキストを私がピックアップして、そこをまた講解メッセージでお分かちしていきたいと思えます。その箇所は新約聖書の**マタイの福音書 1 章**をテキストにしたいと思えます。もちろん **17 節**以降ですねと皆さん思われると思えますが、そうではありません。特に**マタイ 1:1～17**迄を今朝のテキストにしたいと思えます。では、早速拝読させていただきます。

- 1: アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。
- 2: アブラハムにイサクが生まれ、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブにユダとその兄弟たちが生まれ、
- 3: ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、パレスにエスロンが生まれ、エスロンにアラムが生まれ、
- 4: アラムにアミナダブが生まれ、アミナダブにナアソンが生まれ、ナアソンにサルモンが生まれ、
- 5: サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、
- 6: エッサイにダビデ王が生まれた。ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ、
- 7: ソロモンにレハブアムが生まれ、レハブアムにアビヤが生まれ、アビヤにアサが生まれ、
- 8: アサにヨサパテが生まれ、ヨサパテにヨラムが生まれ、ヨラムにウジヤが生まれ、
- 9: ウジヤにヨタムが生まれ、ヨタムにアハズが生まれ、アハズにヒゼキヤが生まれ、
- 10: ヒゼキヤにマナセが生まれ、マナセにアモンが生まれ、アモンにヨシヤが生まれ、
- 11: ヨシヤに、バビロン移住のころエコニヤとその兄弟たちが生まれた。
- 12: バビロン移住の後、エコニヤにサラテルが生まれ、サラテルにゾロバベルが生まれ、
- 13: ゾロバベルにアビウデが生まれ、アビウデにエリヤキムが生まれ、エリヤキムにアゾルが生まれ、
- 14: アゾルにサドクが生まれ、サドクにアキムが生まれ、アキムにエリウデが生まれ、
- 15: エリウデにエレアザルが生まれ、エレアザルにマタンが生まれ、マタンにヤコブが生まれ、
- 16: ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。
- 17: それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる。

読んでおもしろくないものの典型として、電車の時刻表、株の相場、電話帳、競馬の予想表、…。まあそういったものは大半の人にとっては、読んでおもしろくないもの。特別心を揺さぶられたり、特別惹かれるものではない、興味はないというふうに使われている典型かと思えます。そして、もう一つ読んで面白くないもの、無味乾燥で、退屈で、つつい読み飛ばしてしまうもの、それが今私が早口で拝読させて頂いた系図というものであります。皆さんも初めて聖書を開いたとき、新約聖書から読んでみましようと思って**マタイの 1 章**を開いてみたら、カタカナの名前の羅列に面を食らってしまって、ちょっとこれから先読めそうもないと思ってすぐ閉じてしまった、なんて人もいるかもしれませんが、大半の人は実際にはこういったカタカナの名前の羅列、この系図の部分は飛ばし読みをして、これを読んで特別ピンともこないし、こんなところには福音はないのだと。**マタイの福音書**なので是非福音を読みたい。どこが福音

なのか、どこが良い知らせ、グッドニュースなのか、ゴスペルなのか。カタカナの名前の中には、まさか福音なんて語られているはずがないと思って、つつい読み飛ばしてしまうんですけども、自分とは関係ないと思ってしまうわけですね。

でも関わりのある人たちにとっては、これは退屈とは言えないと思います。私たちとイエス・キリストには関わりがあります。この系図はイエス・キリストの系図であると **1 節**で言われています。もし私たちとイエス・キリストとの関係をもってこの系図を見るならば、これは決して退屈なものではなく、イエス・キリストとの関係を深めれば深めるほど、あなたはこの系図無しにはとてもいられなくなってくると思います。成熟したクリスチャンであればあるほど、この系図に興味を持つということです。 **Ⅱテモテ 3:16**にこのような言葉があります。

16: 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

聖書はすべて（ということは、この系図も含めて）神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために（この系図もまた）有益であるということです。カタカナの名前の羅列に何の意味も見出さない、何の興味も見出さない。でも聖書はすべて神の靈感によって書かれたものです。このカタカナの名前ひとつひとつが神様によって意図的に書かれたもので、この順番も勿論大切であります。この中にも教えと戒めと矯正と義の訓練が得られるということでもあります。

マタイの福音書というものは王様としてのイエス・キリストを描いております。福音書といっても新約聖書に4つあります。マタイが最初の福音書、それは**イエスが王である**ということを強調しています。参考までに、続くマルコの福音書は、**イエスがしもべである**ということを強調しています。ルカの福音書は、**イエスが人の子である、人間である**ということのテーマであります。勿論イエスは神であるんですが、でも同時に人となられたお方ということでもあります。で、ヨハネの福音書は、**イエスが神の子である、イエスは神である**ということを強調する福音書であって、**マタイの福音書**はもう一度言いますと、**王としてのイエス・キリストを描いた福音書**であるということです。で、特に**マタイの福音書**はユダヤ人を対象に執筆されました。読者はユダヤ人であるということを意識して書かれたものであります。マタイという人も勿論ユダヤ人です、イエス・キリストの十二使徒のひとりであります。

なぜこの福音書がユダヤ人を対象にしたものかと分かるのか。それは、系図があるからです。ユダヤ人は系図というものを非常に重要視しました。そして他にもこの福音書の中には、ユダヤ人に対して特別なフレーズ、言い回しといったものも多々見られます。そのうちの一つに『御国の福音』という言葉があります。『御国の福音』これは『王国の福音』と言い換えても良いと思います。もちろんこの『王』とはイエス・キリストのことではありますが、イエスはユダヤ人にとってはメシヤである。メシヤとは、キリストということです。ヘブル語では“メシアハ”といいます。それを“メシヤ”と言います。英語では“メサイア”と言います。ギリシャ語では“キリストス”と言って、日本語ではそれを音訳して“キリスト”と言うんですが、全部同じであります。イエスがメシヤである、キリストである、イエス・キリストの系図と**マタイ 1:1**にあります。そのイエス・キリストは王であると。ですからこの王であるイエス・キリストは、『御国の福音』を宣べ伝えるために来られました。そしてこの世界に神の国を確立するために、この世界に来られたということがこの**マタイの福音書**にまとめられております。マタイはこの王としてのイエスの系図から始めることによって、イエスが確かにユダヤ人の王であると。旧約聖書の中でも来たるべきメシヤは、救い主は、キリストは、ユダヤ人の王であるということが預言されておりますので、イエスがまことなるメシヤであるならば、必ず王でなければならぬ、ということなんです。そのことを立証するために、まずは系図からマタイはスタートしております。

イエスに関してはもう一つの系図が福音書に確認できます。それはルカによる福音書 3 章に見られます。また時間のある時にじっくりとマタイの福音書 1 章と比較して読んで頂ければと思います。ルカの 3 章にも系図が記録されていて、そこにはイエスの母マリヤの名前が見られます。ヘリの子ヨセフというのが出てくるんですけども、ヘリというのは実はマリヤのお父さんの名前です。ヨセフのお父さんの名前はヤコブだということは、このマタイの 1 章の系図から知らされるわけですね。ですからルカの 3 章のヘリの子ヨセフという部分は、これはマリヤのお父さんがヘリでありますから、ヨセフにとっては義理の父ということであります。で、その系図は興味深いことに最初の人と呼ばれるアダムにまで遡る系図です。イエスにとっては、これは母方の系図であり、これはアダムまで遡りますので、イエスは確かにアダムの子孫、人間であるということの証明となっています。ルカの福音書のテーマは人の子としてのイエスでありました。ではマタイの 1 章の系図は、イエスの父方のヨセフの系図なのか、と思ったら大間違いです。なぜ大間違いかと言うと、今マタイ 1 : 16 に目を戻して頂きたいと思います。

16 : ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。

16 節にイエスは『ヨセフから生まれた』とは書いてありません。イエスは『マリヤから生まれた』とあります。従ってこのマタイの 1 章の系図は、これはイエスの義理の父ヨセフの系図というふうにも見ることができます。ルカの福音書 3 章の方は、イエスの母マリヤの、母方の系図と見ることができます。イエスは処女マリヤから聖霊によって身ごもって、そして誕生した神の子。その父はヨセフではなくて、父なる神であります。ですからマタイの 1 章では、イエスは『ヨセフから生まれた』とは書いてありません。あくまで『処女マリヤから生まれた』と。その詳しいいきさつについては、マタイ 1 : 18 以降に記録されております。あくまでヨセフは、イエスの実の父親ではなくて、義理の父、育ての父であるということでもあります。で、そのことを踏まえてイエスは、神の子でもある。そして、キリストでもあると。それは旧約聖書の中に約束されたユダヤ人の王としてのメシヤ、救い主ということでもあります。

で、もう一度マタイ 1 : 1 に目を戻して頂きたいと思います。冒頭には『アブラハムの子孫』とありますけれども、アブラハムという人は、ユダヤ人の父、イスラエルの父と呼ばれる人です。で、このアブラハムから生まれる子孫のひとりが約束の子と呼ばれて、そしてその者はキリストと呼ばれるということも旧約聖書に預言されております。その旧約聖書の内容については、創世記 12 : 3、これも後ほど確認していただければと思います。創世記 12 : 3 のところにアブラハムの子孫が全世界を祝福する者となっていく、それが約束の子、約束のメシヤと呼ばれる救い主のことを言及してるんですが、今の創世記 12 : 3 は新約聖書にも引用されております。その引用箇所というのが、ガラテヤ 3 : 8 であります。

8 : 聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、(鍵かっこの中が創世記 12 : 3 の引用箇所です。)「あなたによってすべての国民が祝福される」と前もって福音を告げたのです。

創世記 12 : 3 の言葉は、福音であると。ですからアブラハムの子孫の系図もまた福音であるということです。ついでに、ガラテヤ 3 : 16 もお読みします。

16 : ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言って、多数をさすことはせず、ひとりをさして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリスト

です。

子孫というのは、子々孫々といった複数を指すのではなく、いわゆるユダヤ民族を指すのではなく、ひとりの子孫（単数です）。それはユダヤ人の王となる方。で、このお方はキリストと呼ばれる者であると。今見ている系図というのは、そのひとりの子孫、ユダヤ人の王、キリストを指し示す系図でありますから、これは正に福音であるということです。**ガラテヤの 3 章**ではハッキリと、それはもう福音であると、系図も当然福音書に含まれて、その冒頭を飾っているわけですから、間違いなく系図は福音であるということは、断言できるわけです。

そしてもう一つ、これもテキストに戻って頂いて**マタイ 1:1**の続きであります。『**ダビデの子孫**』とあります。『**ダビデの子孫**』というのは、これは、イスラエルにおいてダビデの子孫は代々王族を形成してきました。王家の血筋であるということの証明であります。イエスは王位継承者であるということです。ダビデという人物については皆さんも良くご存知かと思いますが、彼はかつて生ける真の神様のために素晴らしい神殿を、宮を建てたいという夢を持ちました。でもその夢は儂く破れてしまいます。でも神様はそんなダビデを慰め、励まし、ダビデの想像を超えた大いなる計画というものを見せて下さいました。その計画というのは、ダビデは心の底から神様のために素晴らしい神殿を建てたい、宮を建てたいと願ったのですが、でもそれは叶わなかったんです。でもそれ以上の喜びとして、祝福として、ダビデの子孫から約束のメシヤが生まれると、輩出されるということ。まあこれは落胆をもって、私たちはついつい思い通りにならずに、夢が叶わずに、がっかりしてしまうところですけども、神様はそのように思い通りにならずに、がっかりしてしまった私たちを、驚くような、信じられないような祝福をもって、なだめて下さいます。

まあ今お話しした内容というのは、旧約聖書の**Ⅱサムエル 7 章**に書いてあります。夢破れたダビデに対して神様が驚くべきご計画を明らかにして下さいました。ダビデの世継ぎが、王国を確立させ、その王座をとこしえまでも堅く建てていくと。それは、イスラエルというちっぽけな国の話をしているのではなくて、御国という、神の国という王国を、ダビデの世継ぎが確立させていくんだと。それがメシヤと呼ばれる救い主。で、その王国は永遠に続く王国であるという約束が、今お話しした**Ⅱサムエル 7 章**に詳しく書かれています。

そして、読者であるユダヤ人たちは、メシヤがアブラハムの子孫であって、ダビデの子でなければならぬ、という認識を持っていました。私たちはあまりそうした内容については、詳しくなかったかもしれませんが、今お話ししたことで、何となくユダヤ人の気持ちにも接することができたと思います。ユダヤ人たちはこのような情報を持っていました。旧約聖書というものをもって、来たるべき約束のメシヤとは、アブラハムの子孫であって、そしてダビデの子孫でなければならぬと。これが絶対条件でありました。ですから、真っ先にマタイはその絶対条件がイエスにピッタリ当てはまるんだということを、この系図をもって証明したわけです。そして、自分がアブラハムの子孫であって、同時にダビデの子孫であるということを宣言できるのは、ユダヤ人の中ではたった一人しかいない、ということがここに実は証明されております。たった一人だけです。「アブラハムの子孫なんか沢山いるじゃないですか。ダビデの子孫だっていっぱいいるじゃないですか。なぜイエスだけがその中で唯一のメシヤというふうに見なされるのでしょうか。勝手に自称しただけじゃないでしょうか。」と多くの人は、連想してしまうんですけども、しかし歴史的な事実を今からお伝えしたいと思います。それは、紀元 70 年 (A.D.70) に、当時は、イエスの時代というのは今から 2000 年前の時代です。ローマ帝国によって地中海世界が治められていて、そしてこの聖書の舞台となっているユダヤ、エルサレムといったところも例外なくローマ帝国の支配下にありました。そんなローマ帝国に対してユダヤ人の一部が反乱を起こしたわけです。で、その反乱を治めるために A.D.70 年にローマの将軍のティートスという人がローマの十指軍を率いてやって来て、そしてエルサレム

は焼き討ちにされ、完全に陥落しました。その時にエルサレムにあった神殿にすべてのユダヤ人たちの系図が収められていたわけです。現代で言えば役所に住民票や戸籍謄本といったものがそこに保管されているように、当時は神殿にすべてのユダヤ人の系図というものが保管されていました。でもそれがすべて焼き討ちにあって、焼失してしまったわけです。ですからそれ以降今日に至るまで、イエス・キリスト以外に自分がアブラハムの子孫であってダビデの子孫であると宣言できる者は、一人もいないんです。別の言い方をしますと、「我こそはメシヤである。私がキリストだ。」と断言できる人は、この世界には一人もいないということです。もしその人がキリストであるならば、アブラハムの子孫でなければなりません。であると同時にダビデの子孫でなければなりません。で、そのことを証明する証拠が必要であります。マタイの福音書は、焼失からまぬがれました。これが書かれたのは、A.D.37年頃です。イエスの系図は、勿論神殿にもありましたが、でもイエスの系図はマタイによってここに写し出されて、コピーされましたので、それが今日も焼失せずに残って、そして写本を経て、今でも世界中の言葉に翻訳されて私たちの手にもすることができるようになったわけです。したがって、この系図だけがこの世界で唯一現存するものです。今、世界中のユダヤ人が、自分たちがどの部族に属しているのかも分かりません。A.D.70年以降すべての系図は焼失しまったわけです。ですから、韓国に「私がメシヤである。」というような人もいますね。文鮮明という人です。「我こそはメシヤである。」とんでもないです。聖書によればメシヤは、アブラハムの子孫であり、ダビデの子孫でなければなりませんし、それを勿論彼は証明することができません。焼き討ちにあってしまった痛手、悲劇、それをも神様はイエス・キリストが約束のメシヤであるということ、ユダヤ人の王であることを証明するための神のご計画として用いて下さったということも知ると、私たちは慰められます、励まされます。自分の身に降りかかる悲劇、心の痛手すら、イエスがキリストであるということ証明する出来事として、神様によって用いられるということもあり得るということ、この系図ひとつとっても教えられる。

で、次にこの系図を重んじるユダヤ人にとって重大なことを、ポイントを挙げて皆さんにお分かちしていきたく思います。その重大な事実というのは、ユダヤ人にとっては、これは衝撃的な内容であります。その衝撃的な内容というのは、この系図の中に4人ないし5人の女性の名前が記録されているということです。厳密に系図には4名の女性がいますが、その系図につなげられるようにしてもう一人付け加えられております。その4名を今皆さんに確認して頂きたいと思います。3節を見て下さい。3節にタマルという名前があります。これは女性の名前です。一人目。二人目は5節、ラハブという女性。で、同じく5節にルツという女性が見られます。3人目です。で、4人目が6節にウリヤの妻、無名であります。この人の名前は、皆さんは知っていると思います。バテシェバと言います。で、5番目は、これは系図から外れると言っていいかもしれませんが、16節、マリヤです。5人の女性の名前が見られるということ。これはユダヤ人にとっては、特にユダヤ人男性にとっては、ショッキングなことです。まあこの話をする前に、この5人の女性は、実は恵みの象徴でもあります。聖書で『5』という数字は恵みを表す象徴的な数字で使われます。それも興味深いことでもあります。そしてユダヤ人男性にとってこの女性の名前が系図に見られるというだけで、なぜショックなのかというと、当時ユダヤ人男性が毎日ささげていた祈りを皆さん聞くと、何となく分かると思います。どういった祈りを一般的なユダヤ人男性は毎日欠かさずささげていたかと言いますと、「神様、私が異邦人でもなく、犬でもなく、女にも生まれなかったことを感謝します。」という祈りをユダヤ人男性は毎日ささげてきました。これは圧倒的に男性優位の社会故にです。系図の中に女性の名前が記載されるなんてことは、決して無かったわけです。それは慣例に無い、異例のタブーだったわけです。ですからこの系図を見た時にユダヤ人たちは、特に男性は、衝撃を受けたわけです。「なんだ、この女たちは。4人も5人も。」とびっくりしたわけです。神様がこの系図を通して、この時点で私たちに言わんとしていることは、こういった内容となろうかと思えます。「私が築こうとしている王国は、ユ

ダヤ人が期待するものとは全く異なるものである」と。ユダヤ人が期待するものというのは、当時のローマの圧政から救い出してくれるところの政治的な軍事的なメシヤを期待していたわけですが、神様のなさることはユダヤ人の期待とは異なって、良い意味で大きく裏切るものでありました。その表面的な解決ではなくて、もっと根本的な、霊的な、恒久的な解決、救いというのを神様は計画されていたわけです。ですからユダヤ人といった限定的な民族であったり、またはユダヤ人の男性といった限定的な性別に限った話ではなくて、これは全世界を含めた、また民族や性別を超えた神の救いであることを教えられます。ガラテヤ 3 : 28 には、こういう言葉がパウロという人によって記録されています。

ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。（ガラテヤ 3 : 28）

キリスト・イエスにあって、男も女もないと言われていきます。イエス・キリストは女性を差別や偏見からも解放して下さったお方だということを、この系図を通して教えられます。歴史を辿っていきますと、このイエス・キリストの福音が拒絶されたところでは、女性の扱いは非常に低くて、女性の地位も低いものでありました。福音が浸透していない社会・地域は、大体女性は疎外されてしまう、蔑視される。先進国であってもです。古代ギリシヤにおいて、哲学で洗練された文化です。このギリシヤにおいては、『男は三人の女性を持つべきだ。』というメンタリティーが染みついておりました。三人の女性を男は持つべきだ。一人は子作りのため、（これは法的な妻ということです。）、もう一人は、話し相手としての女、（それは妻と話さなくていいため。）、最後は性欲を満たすだけの愛人と、（まあお妾さんというのが昔はいました。2号、3号、4号と沢山）。まあこういった女性の地位が低いところでは、福音は受け入れられていない。逆に福音が受け入れられているところの地域では、女性の立場は向上していきます。かつて江戸時代、鎖国されていた時にも、やはり女性の地位は低かったわけです。しかし、開国してからプロテスタントの布教が始まって 150 年経ちましたけれども、女性の地位は著しく向上していきました。まあそういった例も世界中で確認できます。

で、話を戻していききたいと思います。ユダヤ人にとってのもう一つのこだわりというのがあります。まあ凝り固まっているもの言っていると思いますが、家系を守るという考え方です。日本人にも通ずるかもしれません。家系を守る、家系を絶やさないということ。武家社会にも似ています。自らの命を落としても御家断絶を免れるというのが、今でもそのような名残があって、自分の家を継ぐ長男を重視したりとか、またいろいろな養子縁組をしてみたりして、何とかして家系を守っていく、絶やさないようにといった考えは、日本人にもよく理解できると思います。そのことを心に留めて頂きながら、最初に登場するタマルという女性について簡単にご説明させて頂きたいと思います。このタマルという女性は、名前の意味から先に伝えていきたいと思います。日本人と同じで、名前にはユダヤ人も意味を持たせておられます。タマルという女性の名前の意味は『ナツメヤシの木』という、これは樹木の名前であり、非常に美しい木、ヤシの木を想像して頂ければと思いますが、この美しい木、ナツメヤシの木は、よく女性の名前に使われました。日本で言えばさしずめ『桜さん』とか『梅子さん』といったところかもしれません。で、このタマルという女性の物語は、創世記 38 章に詳しく見ることができます。アブラハムの孫のヤコブという人には 12 人の子供がいました。この 12 人がそれぞれイスラエルの 12 部族の族長となっていくんですが、その 12 人の子供の一人にユダという人がいました。このユダからユダヤ民族が生まれるのですが、そのユダには三人の息子がおりました。エルとオナンとシェラといひます。で、長男のエルはタマルと結婚したんです。でも、このエルは神様をなんらかの形で怒らせていましたので、命をとられてしまいました。当時の習慣では、妻が夫に先立たれた場合、もし子供が無く残された場合は、その死んだ兄の弟が（勿論

独身である必要性がありますが)、その弟が亡き兄嫁を迎え入れて、そして兄の名前を残す、兄の子孫を残すということをしました。これをレビラト婚という慣習として、古代は行っておりました。日本でもそのような慣習はかつてありました。で、丁度エルという長男が死んだので、次男のオナンがタマルをめとりました。しかし、オナンは生まれる子が自分のものにならないということを知って、ある種のバースコントロール、産児制限といったものを行って、義弟としての務めを果たしませんでした。これも主を怒らせたので、このオナンも殺されてしまいました。エルもオナンも亡くなって、残されたのは末っ子のシェラ一人になりました。お父さんのユダは、シェラもまた兄たちと同じように死ぬといけないという不安を感じまして、タマルには「シェラが成人するまで実家でやもめのままで待っていなさい。」と言います。でも長い歳月と共に、^{しゅうと}舅のユダはこの約束を反故にしようとしたわけです。タマルは、そのことがだんだん分かってきました。^{うっぐん}鬱憤が溜まるわけです。それでタマルはやもめの服を脱いで、(当時やもめは、やもめの服を着なければならなかったんです。パッと見てこの人はやもめだと分かる服を着ていたんですが)、ベールを被って遊女の、売春婦の恰好をしました。そして、^{しゅうと}姑のユダがよく旅する道に、まるで遊女のようにして構えていたわけでした。で、ユダは彼女を、もう遊女・売春婦だと思って、声をかけて関係を持ちました。しかし、ユダには彼女に支払う持ち合わせが無かったので、後で仔山羊を送るという約束をしてその保障として、印形とひもと杖をこの遊女に、タマルとは知らぬ遊女に手渡したわけでした。身分を証明するものが、印形とか、ひもとか、杖と。ID といったものですね。タマルはそれを預かったわけでした。ユダはそれがタマルと知る由もありませんでした。で、3ヶ月後にビックリするニュースがユダの耳に飛び込んできました。あなたの息子の嫁のやもめのタマルが、売春によって身ごもった、という知らせが届いたわけでした。ユダは激怒して、「彼女を焼き殺せ」と激しく怒ります。そこでタマルはユダのところに使いをやって、彼の印形とひもと杖を届けさせました。その時のユダの顔は見ものだったと思います。で、彼は息子を彼女に嫁がせなかったという過ちを認めて、結局その子供はユダの子供として育てられるわけです。男尊女卑と家系を重んじるユダヤ人に対して主は敢えてタマルのような女性を系図に載せられました。イエス・キリストの系図にこんな罪深い女の名前が載せられるなんて、ちょっと信じ難い、受け入れ難いと思うかもしれませんが、理由はただ一つです。それは、タマルという女が罪人であったからです。罪人だったのでイエスの系図に加えられました。

まあこの意味についてはまたおいおい触れていきますが、次に二人目の女性としてラハブという名前を取り上げたいと思います。ラハブはどんな女性だったのか。名前の意味は『白い』です。ですから『白子さん』といった感じかもしれません。彼女は、なんとプロの遊女でした。売春婦だったんです。まあタマルは今で言えば『出会い系サイトなどを使った主婦』みたいなものです。でもこのラハブは、プロの権堂で働いているような、歌舞伎町のそういった女性でありました。ユダヤ人は家系を重んじるだけではなく、性道徳、性的純潔、節操を守るということを重大視しておりました。いわゆるモラリストだったということです。このラハブについてはヨシュア記というところに詳しく見ることができますが、そのヨシュアという人の時代にイスラエルのスパイが、約束の地と呼ばれる(今で言えばパレスチナ地域です。)そこに入植するに当たって偵察隊・スパイを送りました。で、そのところに難攻不落とされるエリコという町があったんですが、そこを偵察しておりました。で、そのスパイたちが敵に見つかりそうになったので、このラハブというエリコに住む売春婦が、その彼らをかかまって助けました。命がけでありました。その詳しい話は是非ヨシュア記で確認して頂きたいと思います。でも、その彼女もイエス・キリストの系図に名前を連ねるばかりか、驚くことに新約聖書のヘブル人への手紙の 11 章にも、偉大な信仰者、信仰の勇者たちの一人としても名を連ね、またヤコブの手紙の 2 章にまで彼女の名前は記録されます。どんなに偉大な信仰の人かということが^{うかが}窺い知れます。それはラハブが遊女だったからではありません。彼女が素晴らしかったのは、限られた知識や理解にもかかわらず、すべてを賭けて、命を賭けて、リスクを顧みずに、「イス

ラエルの神こそが真の生ける神である。」と信じたところにあります。この罪深い彼女が系図に載った理由は、その信仰の故であります。タマルがこの系図に載ったのは罪人であるが故、ラハブがこの系図に載ったのは信仰の故であります。

次に3番目の女性として、ルツという名前を取り上げます。ルツという名前の意味は、『友』友達の友です。ですから『友子さん』という感じです。彼女は、^{しゅうとめ} 姑 思いの素敵な女性として登場します。詳しいことはルツ記を読むと分かります。しかし、このルツという女性はユダヤ人ではありません。彼女はモアブ人という女性です。ここにもユダヤ人のこだわりがあります。先には家系を重んじる、道徳観念、そしてもう一つのこだわり3番目が民族的純潔です。ユダヤ人は単一民族であることを誇りとしていました。混血によって汚染されないということをこだわっていたわけです。例えばユダヤ人が、道すがら外国人（異邦人とも言います。非ユダヤ人のことです。）とユダヤ人が接触してしまった、袖が触れ合ってしまったなんていう事件が起こると、そのユダヤ人は、即刻家に引き返します。ビジネスの途中でも買い物の途中でも即刻自分の家に帰って、服を脱いで、それを燃やします。異邦人と触れたから汚れたということです。そしてお風呂に入って、身を清めて、また新しい着物に着替えて用事に戻る、といった徹底具合であります。ユダヤ人の教師ラビという人たちは、このように教えていました。「神は異邦人を地獄の火を絶やさないための焚き木としてお造りになったのだ」と。天国に行けるのはユダヤ人だけで、非ユダヤ人である異邦人は天国には行けない。なぜ彼らが存在するか、それは地獄の炎が絶えないための焚き木なんだと。すごい教えであります。その系図に出てきたのは異邦人なんです。ルツはモアブ人という外国人、外人です。日本でも外国人は、外国人登録をして彼らはエイリアンと呼ばれています。本当の話です。最近エイリアンというのはちょっと差別だということで名前をフォーリナーとかいろいろ変えていますけれども、パスポートもエイリアンと。日本人も外国の人を差別する傾向があります。外人という呼び名は差別用語と言えるかと思います。で、ここのモアブ人もやはり外人とみなす異邦人、これは相容れない存在です。犬猿の仲であります。

実はこの4人の女性たち、まだもう一人いますけれども全員ユダヤ人ではないんです。全員、非ユダヤ人、異邦人なんですね。女性の名前が系図に見られるだけでもショックですが、しかもその女性たちは皆ユダヤ人ではない外国人である、とんでもない。タマルとラハブはカナン人という外国人です。ルツはモアブ人と紹介しました。で、次に出てくるウリヤの妻バテシェバという名前ですが、彼女はヘテ人という外国人です。しかし、この特にモアブ人に関しては、ユダヤ人の律法には大変厳しい定めがあります。掟があります。その掟というのは**申命記 23 : 3**に書いてありますけれども、

アモン人とモアブ人は主の集會に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して、主の集會に、入ることはできない。(申命記 23 : 3)

特に『アモン人とモアブ人は主の集會に加わってはならない。』という律法が定められていました。このようにユダヤ人の律法ではモアブ人であるルツは完全に締め出された存在ですけれども、しかしユダヤ人男性の中で誠実な男、信仰の人ボアズという人は、このルツを恵みをもって受け入れ、やもめであったルツですが、妻として迎え入れました。そのラブストーリーについては、詳しくルツ記に書かれております。ボアズという人はイエス・キリストのひな形のようにして描かれております。女性だけでなく、異邦人の差別も（これは人種差別、民族差別も）撤廃されるどころ、それがイエス・キリストの王国であります。これらの女性たちが系図に載せられた理由を見ていくうちに、ある流れを発見できます。その流れというのは、罪人、信仰、そして恵みによって救われた。罪人、恵みによって、信じることを通して救われる、というふうな発展を見ることができます。

で、4番目のお出まは、**ウリヤの妻**。彼女の名前は系図には出ておりません。なぜかという、彼女は他人の妻だったからです。バテシェバというのがその名前です。名前の意味は『誓いの娘』又は『富んだ娘』、富子さんといった感じでしょうか。このバテシェバに関しては彼女自身の罪というよりも、不倫の罪を行ったダビデの罪が際立っております。ユダヤ人は自分たちの歴史を誇りました。特にダビデ王は彼らにとっての英雄です。日本人にとっては坂本龍馬とか、又は戦国の武将たち信長とか秀吉とか家康とかといったヒーローたちです。ダビデはユダヤ人にとってNo.1の英雄でありました。その英雄のダビデがバテシェバとの、人妻との情事。そして不倫もみ消しのためにバテシェバの夫ウリヤを謀殺したというスキャンダルは、ユダヤ人にとっては非常に耳痛い事、触れられたくない事実でありました。まあダビデという人は自分の蒔いた種を刈り取ることになりました。神様から離れて、まるで羊飼いかから離れた迷える羊、失われた羊のような状態だったのですが、でも羊飼いである神様はダビデを見捨てることもなさいませんでした。悔い改めたダビデを赦されたんです。この赦しの場面というのは、歌になりました。**詩篇 51 篇**が悔い改めの詩篇として有名であります。このバテシェバがイエスの系図に名前を残せたのは、ひとえに神の恵みによるものです。ダビデのように信仰者であっても、救われた者でも罪を犯します。でも神は見捨てません。彼らの罪を赦すためにイエスはこの世に来られました。罪だとか、呪いだとか、汚点だとか、恥辱に満ちたこの系図を、神の恵みの系図に変えるために、神はすべての罪を御子イエス・キリストの十字架で負わせて、そして贖って下さいました。この系図こそが恵みの福音、救いの物語そのものであります。**恵み**というのは、『**分不相応な者に与えられ過分な親切**』と定義されます。当然受けるべきでないものを、受けることです。何の働きもない者に功なくして与えられるものであります。そのような恵みが今私たちにも注がれているということ。

で、最後に5人目の女性として、**マリヤ**という人。この人については説明は要らないと思いますが、当時マリヤはまだ年端もいかないティーンエイジャーです。15歳にも満ちていなかったと思われます。ナザレという町の出身で、ナザレは本当に無名の町で、当時ローマ帝国におもねった人たちが集まって金儲けをして、ユダヤ人の中ではあまり良く思われていない地域の出身であります。軽蔑され、見下されて、そして年端もいかない、多分15歳にも満ちていない女の子です。しかも貧乏であります。取るに足らないはしためといったイメージでいいと思いますね。でもそのマリヤには、「**神には不可能なことは一つもない。**」という素晴らしい信仰が与えられておりました。だからこそ神はこのマリヤを選んで、イエスの母とされました。

神様は、マタイを通してこれらの名前、女性の名前を系図に載せることによって、霊的自己満足や又は自己義認に陥っている、装っているユダヤ人たちのプライドを揺さぶって、メシヤの到来の警鐘を鳴らすものとなりました。神様が今私たちにこの系図を通して言わんとされていることを最後にまとめて終わりたいと思います。「**私の王国は、天の御国であってイスラエル民族の限られた王国ではないということ。**」神の国はイスラエルに限定されないということ。このことは、キリストにあつて男も女もない、ユダヤ人もギリシャ人もないというところを見ました。日本人もアメリカ人もないんだ、ということ。で、それは神学的な見地としては、まあいい話ですねということで、人ごとのように皆さん思うかもしれませんが、最後にもう一つパンチラインとして皆さんの心にしっかりと刻んで頂きたいのは、この系図を個人的な見地で見て頂きたいということです。あなたは心の中でこう言うかもしれません。「私は取り返しのつかない大きな罪を犯してしまいました。神様はもうこんな私を絶対に用いて下さることはないでしょう。私は自分の罪によって家族を犠牲にしました。めっちゃめっちゃにしまいました、まるでタマルのように。」でも神様は彼女を神の家族に加えて下さいました。イエスは「**罪人を招くためにこの世に来られた。**」とおっしゃっております。又は中には「神様、私のような評判の悪いごろつきを用いられはしないんだと。人から私は白眼視されている。悪者に見られている。」そんなあなたはラブを思い出してほしいと思います。あな

たが何者で何をしたのか。それは問題ではありません。信仰をもってラハブと共にこの信仰の家族の系図に載せて頂くことができます。また中には「私はまるでモアブの人のように感じます。全くの部外者です。教会とは無縁です。私はクリスチャンの家庭で育ったわけではありません。むしろ仏教の家で育ちました。異教徒なんです。」でも是非ルツのことを思い出して下さい。ルツの信仰も非常に浅いものであります。で、中には「私はマリヤのように名もない取るに足りない者です。私はまだまだ若いです。貧しいです。幼い頃から教会には通っているけれども、私なんかまだまだ非力で何もできません。」という人もいるかもしれません。でも神様はどんな人でも受け入れて下さるということをこの系図の中で教えられます。私たちが何者であろうと、どんな過去を持っていたとしても、今現在罪を犯している人もこの中にいるでしょう。でもダビデのように悔い改めることができるならば、神の恵みに預かることができます。どんなに小さくて無力であっても神様は偉大なことのために、神の栄光のために、ティーンエイジャーのマリヤを用いて下さいました。あなたも用いられます。このイエス・キリストの系図に感謝したいと思います。それは私たちに希望を与えるからです。最後にローマ 8 : 1 を拝読します。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

イエス・キリストを信じる者がもはや罪に定められることは、救いを失ったり、地獄行きを宣告されることは、もはや絶対はないという約束の言葉です。あなたもこのイエス・キリストの系図の中に加わることができます。すなわち神の家族に加わることが出来るんです。イエス・キリストを信じることによって。この方の御名を信じる者は神の子どもとされる特権が与えられるとヨハネ 1 : 12 にも書いてあります。その名前は、神の手にあるいのちの書に記されます。あなたは、いのちの書に名前を刻まれるんです。是非、イエス・キリストを信じてない人たちは、この系図を見て「私のような者でも神の恵みによって救って頂けるんだ。そして神の家族に加えて頂いて、そしてこれまでのすべてを受け入れられ、赦され、帳消しにされ、そして新しい人生を歩むことができるようになるんだ。」というこの希望を、是非自分のものとして頂きたいと思います。皆さんはこれまでは、系図を読んでも見ても、飛ばしていたかもしれませんが、とりあえず系図は飛ばして次に行こうと思っていたかもしれませんが、是非これからは系図にしっかりと目を留めて、ここに宝石のような、宝箱のような福音が散りばめられた系図が、価値のあるものだということを皆さんは今日感じ取って下さったと思いますので、是非そのような目で、すべて神の靈感によって書かれたものとして受けて頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。